

鉄斎が飯田氏に送ったザクロの絵



富岡鉄斎が大正十年に高島屋社長飯田氏に描いた（贈った）ザクロの絵。ザクロは種が多く子孫繁栄の意味を込めて、高島屋の商売繁盛を願い描いたと思われます。

その後高島屋さんが創業100年のお礼にと扇子にして外商部のお客様に配った物（らしい）です。会長夫人の実家（奈良）にあった曾祖母から譲り受けたもの。

富岡 鉄斎（とみおか てっさい、1837年1月25日（天保7年12月19日） - 1924年12月31日）明治・大正期の文人画家、儒学者。日本最後の文人と謳われる。



鉄斎の書「忘機得真趣」 機を忘れ真趣を得。



明治の文人画家・富岡鉄斎が 85 歳の時に書いた書「忘機得真趣」。機を忘れ真趣を得という意味。(きをわすれしんしゅをえ) チャンスチャンスと力むのではなく忘れた頃に (リラックスした時に) 本当の趣を得ることが出来る。という意味だそうです。

先代の吉田吉之助がその「書」を買い、自ら初めて木 (柳) に彫った書です。昭和 30 年頃テレビが普及する中、テレビを買わずにこの書を買ひ、家族は大揉めしたとか、しなかったとか。そんな思い出の書です。

秋葉原のとんかつ専門店「丸五」さんに長く飾って頂きましたが、この日本橋店開店前に竹内社長より頂きました。※丸五さんはかつ吉からの独立店です。



吉田吉之助 (かつ吉創業者:故人)

呦々鹿鳴（ゆうゆうとしかなく）



日比谷に戦前あった「山水楼」のオーナー宮田武義さんの書。先代吉之助のために「鹿は美味しいものが見つかりと仲間達に鳴いて教える。飲食店もお客様からの美味しいと良く口コミを大切にしていきましょう」という意味を込めて書いて頂いたそうです。

木は欅（けやき）材。彫ったのは現会長吉田次郎。

山水楼とは、戦前、日比谷にあった本格広東料理のレストランで、大正 11 年創立。創立者の宮田武義。戦後出張料理の注文が相次ぎ、宮家、政治家の邸宅からの注文に追われたという。多くの政治家にひいきにされ繁盛した。昭和 120 年 1 月の空襲で建物は壊滅した。

村松梢風氏の書「古書可読 古酒可飲 旧友可親」
古書読むべし。古酒飲むべし。旧友親しむべし



先代（吉田吉之助）が昭和 30 年代当時のかつ吉日本橋店のお客様であった村松梢風（むらまつしょうふう）さんから頂いた書。それを彫った物。こちらも櫻材。彫刻は現会長吉田次郎作。

新しい物（流行り）ばかりを好むのではなく、長く読み続けられている古い書物を読むことは大事だよ。長く醸造された古いお酒を飲んでみなさい、美味しいから。昔からの友達と親しくしなさい（大切にしなさい）という教え。

※日本では新酒が好まれることが多いですが、世界（特に中国）では生まれた時に仕込んだお酒を、成人する時や結婚する時に飲み、それが最高に美味しいようです（老酒など）。

作家・村松梢風（むらまつ しょうふう）。1889 年（明治 22 年） - 1961 年（昭和 36 年）日本の小説家。作家「村松友視」の祖父。

印版皿（いんばんざら）



印判とは明治以降に行われる様になった、絵柄を転写する絵付けの方法を言います。転写シートに描かれた模様を、陶器に写して焼きつける方法です。

この技術が生まれる以前の陶器は、染付(手描き)での絵付けが主流だった為、当時の陶器はとても高価で、庶民は木や竹の器などを主に使用しておりました。

ですが、この技術が発展したおかげで、陶器の大量生産が可能になり、それまで高価で使用することが出来なかった庶民たちも、気軽に陶器を使える身近な器となりました。

決して超高価なお皿ではありませんが、この醸し出す雰囲気が好きで、今回の日本橋店に並べることにしました。

蕎麦猪口（そばちょこ）



こちらも江戸時代の物は染付（手書き）。明治以降は印版（印刷）の物があります。先代吉之助が大量にコレクションをしていたので、かつ吉には現在もたくさん並べることが出来ています。

蕎麦猪口は江戸時代前期に佐賀県の伊万里で焼かれたのがはじまりと言われています。蕎麦猪口は真っ直ぐなラインで単純な形状ですが、専門家によれば、時代により若干形が異なり、それぞれ下記のような特徴を持っています。

※参考までに

江戸時代初期～前期…形は下が小さく上の方が大きい逆円錐形。

江戸時代中期…やや下の方が大きくなったが、まだ逆円錐形を保っている。底は薄い。

江戸時代後期…形は円筒形に近く、底はさらに薄くなり、真ん中がへこんでいる。

明治時代…ヨーロッパで発明された合成呉須の染付が入ってきたことにより、鮮やかな藍色をした蕎麦猪口が増える。